書評

新しい幼児の造形あそび12カ月

○今幼稚園、保育園で一番ほしい本というのは、絵画製作の解りやすい、すぐ使える本ではないだろうか。

この本は、そのために作られたような本である。

○しかも思いつきや、線香花火のように、一時的で、もう明日は使えないというものでない、本物がほしい。

この本の強みは、芸研の仲間が粘土研究班、色彩研究班などに分かれて、実際に園で三年間にわたって試みた実験結果の汗の集録である。

○理論体系の骨組がしっかりしていて、しかもフレッシュマンでも解りやすいものであってほしい。

この本は、写真や凸版が豊富で、4月から3月までの造形あそびが、4才児5才児と分けて体系化され、ねらい・材料・方法・発展と指導面が、実にわかりやすくかいてある。そして、題材のとらえ方が、子どもにふさわしく新鮮で、ありきたりでない。例えば粘土のにぎりっこ・造形のくらべっこ・色彩のつなぎっこなどという具合である。

巻末ふろくのカリキュラムだけでも大いに参考になるはずで、幼児の造形の価値がますます大きく謳われている時、いい本が生まれたもので、保育の実践家のみなさんに心からこの本をおすすめしたいと思う。

（林　健　造）

編集　芸術教育研究所
黎明書房版　定価五八〇円

文部時報 第一〇三二号

文部時報の八月号は、幼児教育に関する特集号である。最近、幼児教育をめぐって、いろいろと論議が活発であるが、この特集号は、このような時代の流れを扱うのではなく、幼児教育の基本的な方向を考える努力をしている。内容は、次の通りである。牛島義友「幼児教育における保育と学習」、ここでは、幼稚園における学習の問題について、イギリスやフランスの傾向が示され、それと対比して日本の現状が論じられている。そして、自由遊びの意義と、保育内容としての自由遊びが、性格教育の場として再認識されなければならないこと、知性と徳性、家庭生活と学校生活の調和の重要性が強調されている。多田鉄雄「就学前教育の現状と問題点」は、幼稚園・保育所の現況を、施設数・園児数の上からの資料を提出し、幼稚園と保育所の制度的な問題を諸外国の例と照らしながら、適切な資料を提供している。幼稚園と保育所が二元的な制度をもつところは世界に例を見ないし、教育的視点からは一元的に考えるべきであるにもかかわらず、現実の実際問題は困難なものを多くふくむことを指摘している。西村勝己（文部省、初等教育課長）「就学前教育の発展—幼稚園教育発展の概観」は、主として制度の面から教育内容、施設設備、教員養成待遇などの問題について、明治大正昭和の歩みを追って、今後の幼児教育普及の方向を望見している。座談会「各国における就学前教育」は、諸外国の現状と今後の課題について語り合われている。（津守真）

発行所　新宿区西五軒町五二
帝国地方行政学会